勝山の近代産業の父、林毛川

林毛川肖像
（山田秋甫『林毛川』より）

幕末明治期に発展した勝山煙草や繊維を伝統産業に導き、また、藩校を設立し人材育成に努めるなど、勝山繁栄の礎を築いた人物が林毛川です。

毛川（字は季梁。通称を芥蔵）は代々小笠原藩の家老職を勤める林家の三男として、享和元（1801）年に生まれました。毛川の名は「毛谷川＝定川」に由来します。「川に心は無いが昼夜休むことなく流れ田畑を潤し、領民に恵を与え世の中の役に立つ。自分は川の水にも及ばない人間であってはならない、何としても人の役立つ人間になろう」。彼は20歳頃から約7年、江戸の昌平坂学問所で学び、頼山陽など一流の学者と親交を深め、その経験を藩政改革に活かします。毛川は自著「時務拙論附改革要務」に基づき、天保11（1840）年から藩主、小笠原長守のもとで藩政改革を始めました。

その改革は多岐に及びましたが、その第一は煙草の藩専売を実施したことです。高品質の勝山産煙草に目をつけ、嘉永6（1853）年、「煙草改会所」を設け領外への輸送・販売を行いました。路線は引き継がれ、安政4（1857）年には「諸産物改会所」が設けられ、製糸にも力が注がれます。こうして、勝山の伝統産業である煙草・繊維産業への道が拓かれたのです。

第二は藩校を設立し、人材を育成したことです。天保14（1843）年、藩医、秦魯斎の建言に基づき、藩校成器堂を創設。その特色の一つは、小笠原礼法を伝える藩として習礼を学ばせたこと、二つ目は医学教育を取り入れたことです。文久3（1863）年、魯斎の三男、朴三郎は、オランダ軍医ポンペの「朋氏解体書」を筆写し「成器堂文庫」に加えています。

なお、成器堂は、後に福井県の繊維産業を牽引する人物を多数輩出します。明治5（1872）年には、成器堂出身の齋藤遊絲、小林平三郎が富岡製糸場に工女を派遣し、県内で先駆けて「勝山製糸会社」の設立に尽力しています。

明治24（1891）年に孫たちが出版した「毛川遺稿」では、毛川の人柄を次のように評しています。「歴史に詳しく文章は力強い、性格は剛直で人におもねることは無い、議論は徹底して行うが終わると何のこだわりも残さない」。また、安政2（1855）年に書かれた「春日偶成」には、毛川の遺言ともいえる「壮士忠魂死不滅」の言葉が残されています。毛川の残した功績から、大正13（1924）年には、正五位を贈位されました。

現在、市内には成器堂の遺構として講堂など3つが残っており、毛川の功績を今に伝えています。

旧成器堂講堂（神明神社社務所）

関連史料・ゆかりの地

林季梁遺徳碑

碑文627文字から成るこの碑は明治22（1889）年に建てられました。文は日本最初の文学博士である重野安繹によるものです。そこには成器堂の成立事情など藩政改革の経緯、毛川の人間性も含めた人物像などが記されています。

【住所】勝山市元町1丁目勝山市民会館前（えちぜん鉄道勝山駅より徒歩13分）

参考資料等　林毛川『時務拙論附改革要務』、林毛川『上書草稿』、安田仁一郎『勝山藩古事記』新東京社、林毛川『毛川遺稿』林鶴太 他

執筆・協力　勝山市教育委員会

発行／福井県観光営業部ブランド営業課